

# 玄同放言

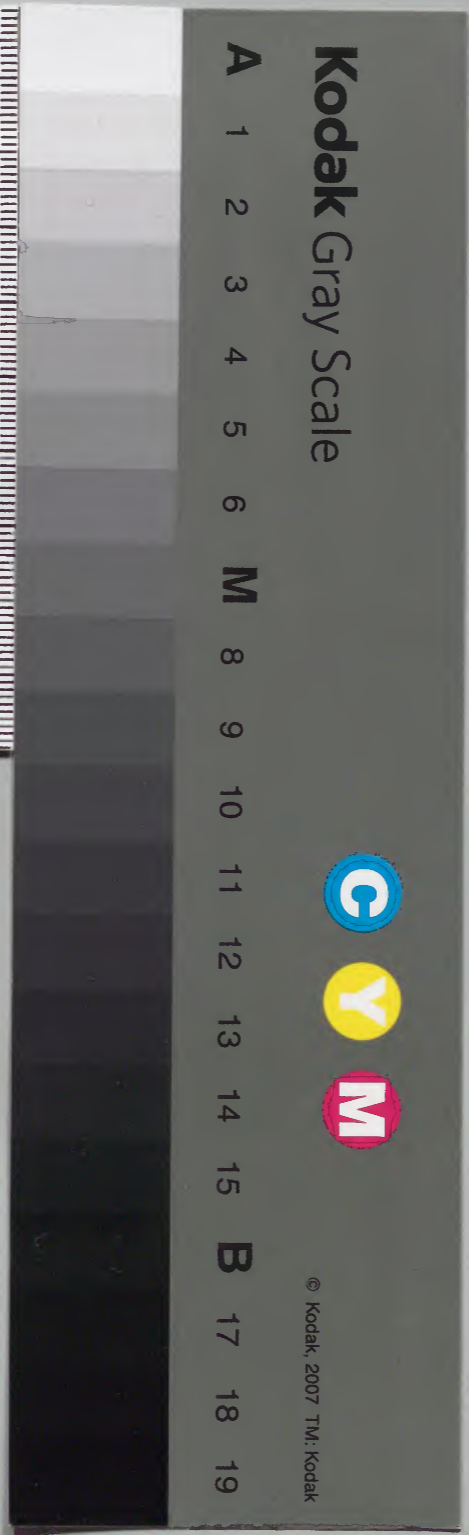
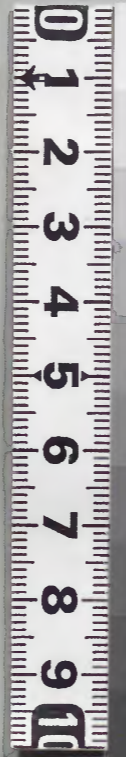
卷五甲

|                       |             |   |   |
|-----------------------|-------------|---|---|
| 和書門                   |             |   |   |
| 一<br>九<br>〇<br>二<br>七 | 一<br>八<br>〇 | 函 | 類 |
| 架                     | 冊           | 六 |   |

|                       |   |   |    |
|-----------------------|---|---|----|
| 內閣文庫                  |   |   |    |
| 一<br>九<br>〇<br>二<br>七 | 大 | 函 | 和書 |
| 架                     | 冊 | 三 |    |

(五甲)

|      |         |
|------|---------|
| 內閣文庫 |         |
| 番號   | 和 19027 |
| 冊數   | 6 ( 5 ) |
| 函號   | 213 93  |



玄同放言卷之三 中 第四本

淺草文庫

荏土 瀧澤解瑣吉甫著

第三十二事

壽算

謝肇淛云人壽不過百歲數之終也故過百二十不死謂之失歸之妖五雜俎卷之五云凡六十歲二百餘歲造此和漢之妖

唯三百歲得之天朝獨武内宿祢若浦鳴子雖載之于雄略紀

高成子數輩並以出於當時小說漢土有彭祖為神仙者不與焉といはるる其の薨也此年と誌されど所謂史の闕文なり

後より年をいひ各おぼたむれば愚管鈔卷一皇帝年代記仁徳天皇の

條下云大臣武内宿祢この大臣六代御後見や二百八十餘年を経りこれ

ところをいふ同書卷三仁徳天皇の段水鏡卷上仁徳天皇の段云五十五年と

おもふ武内大臣うせむと二百八十をたり玉ひ六代の御かどのけうりこと

二百四十四年とをいおせ云云神皇正統紀仁徳紀皇統紹運録

玄同放言卷三中

武内宿祢

仙鶴堂梓

孝元天皇五世武内宿祢の下に細書あり水鏡を引く公卿補任ハ  
三百十二歳といふこの唐山中粗史なるや宋史列傳日本傳云  
應神天皇甲辰歲始於百濟得中國文字今號八蕃菩薩有  
大臣紀武内三百七歳次云云舟州山人四部稿卷一百六十五宛委  
餘編引宋史云日本國有大臣紀武内者年三百七歳尤爲  
異聞五雜組人部亦云日本紀武内三百七歳とも宋史は據  
るに按ずるに宋史列傳云雍熙宋太宗元年丁未天朝圓融日本  
國僧裔然與其徒五六人海而至日本紀略圓融紀云天元四王  
依本寺唐獻銅器十餘事並本國職員今王年代紀各一卷がれ  
宋史紀武内云云とありハ裔然が齋る年代紀は扱ふならん武内宿祢の  
母氏ハ紀伊國の人より紀とて氏とあり然る書紀ハ紀と被くハハハ  
内宿祢男角宿祢爲鼻唐山中紀武内と唱ふるハ裔然の所爲あるべし  
祖見新撰姓氏錄卷二

常山樓筆餘卷二云武内ハ景行天皇ノ十年庚辰ニ生レ仁徳天皇ノ  
五十七年己巳ニ至テ二百九十年ナリ然レ氏景行天皇二十五年武内  
北陸及東國ヲ監セラレシコト國史ニ見エタリ其時壯年ナルベシ今  
コレヲ以推計ル二十年ヨリ前ニ生レタルベケレバ三百餘歳ナルコト誤ナラズ  
トオボユとありこの説も亦訛なり何となれば景行紀ハ武内宿祢の生れと  
條と成務紀ハ武内宿祢と大臣とありけり條と同紀ハ天皇崩御の條とを  
照して見ればこの大臣ハ景行天皇十四年ニ生レ下り證文をえり余が言  
誣ざるをある書紀七卷景行紀云三年春二月庚寅朔ト幸于紀  
伊國將祭祀羣神祇而不吉乃車駕止之遣屋主忍男武雄  
心命武雄令祭爰屋主忍男武雄心命詣之居于阿備拍  
原而祭祀神祇仍住九年則娶紀直祖菟道彦之女影媛生  
武内宿祢この文比を考ハ武内の生れをいづもの年ことハ決ぐさしかく

玄同放言卷三中 ○武内宿祢 仙鶴堂梓



なるん公卿補任は後ひて、三百十二歳とせれば、仁徳八十三年は薨せし。宋史は因て、  
 三百七歳とせれば、仁徳七十八年は薨せし。水鏡は後ひて、二百八十歳とせれば、  
 仁徳五十一年は薨せし。今、仁徳履中、兩紀の文より由て考ふ、三百十二歳その實を  
 知るが如し。仁徳八十三年、武内薨し、八十七年正月、天皇崩す。あつても史の闕文を  
 強く説をなせしめ、傳會に又按る、允恭紀、五年、秋七月、命玉  
 田宿祢主瑞齒別天皇。又正之。之。云云。條下云、玉田宿祢、則  
 畏有事、以馬一匹、授吾襲爲禮幣、乃密遮吾襲而殺于道路。  
 因以逃隱武内宿祢之墓城。時在葛城。天皇聞之、云云。武内  
 宿祢薨後、のり、絶はあふええり。仁徳天皇八十三年より、允恭天皇五年に  
 至り、廿二年、又按る、武内宿祢の子、水菟宿祢は、應神天皇廿一年、皇子  
 大鷦鷯尊、仁徳と同日に生れり。見仁徳紀、元年、條下、その年、應神天皇、聖壽九十一  
 武内宿祢は二百七歳、二百歳はあつて、子を生せり。亦怪む足るといへども、

應神、聖壽古  
 車記、作三百  
 三十一、印行書  
 紀、作百一十  
 一本、作百十  
 一、為是。

履中天皇二年は、水菟宿祢、一百十二歳中、始て執政をせり。まづ上古の  
 人の血氣、今の老人とむねどかなくもあはれ。周武王が年八十一歳で、成王を生せり。と  
 聖人中、似けをせり。いづく誹りもあはれども、武内は比ば、武王はなほ乳臭の  
 童子にぞ、掛畏記、神武天皇より、仁徳天皇に至らせ玉ふまで、聖壽百歳は  
 餘せ玉ふ天子少か。神武天皇百二十七歳、孝昭天皇百十四歳、孝安天皇百三十七歳  
 孝靈天皇百二十八歳、孝元天皇百十七歳、開化天皇百十五歳  
 崇神天皇百二十歳、垂仁天皇百四十歳、景行天皇百四十歳、成務天皇百七歳  
 神功皇后百一歳、應神天皇百一歳、仁徳天皇百十歳  
 況田、夫野人、百歳二百歳は、追ふもの、いづくもあはれんか。南亩別志、卷云、武内、  
 宿祢が三百歳、數代同名あへ、三韓を威服せんがごとし。後世、戦国、公はら  
 権詐もあはれ、安房の里見の老臣、正木氏の如き、邈古質朴の世、ゆるく巧む計あへ、やハ情偽を  
 揣るは過る。上古、人壽百歳を大際とせり。只天朝のあはれ、異邦といふも、  
 亦、か、明王世、貞りの人壽を考究し、詳より、要を提てり。抄録、  
 宛委餘編、十、云、人壽至百歳、而極、彭祖七百歳、自服、櫻丹、後

玄同放言卷三、中 ○聖壽唐山壽 仙鶴堂梓

太公年百三十六  
十六曲下文  
乃當作年百五十二

宋卿云云事  
文前集年齒  
部引洞微志  
亦高之而其  
年紀不同宜  
合考焉

入流沙亦不言死帝王世紀神農在位百二十年黃帝少昊  
俱在位百年帝嚳年百五歲堯年百一十八舜年百有十禹  
湯年滿百六韞云文王祖古公壽百二十王季百歲文王九  
十七武王九十三周穆王五十即位  
在位五十五年蓋世壽  
也太公年百三十六詔公百八十畢公年亦百餘漢文帝時  
有樂人竇公者亦年百八十漢張蒼拜相封侯年百餘歲魏  
范湖波奴二百四十歲晉范長生兩仕蜀前後百年魏羅結  
百七歲為外都大官百二十乃卒梁穰城人年百四十歲唯  
飲乳鍾離人顧思遠年一百十二歲九九娶有子十二人死  
亡略盡召為散騎侍郎亦至百二十而卒上津人張元始年  
一百十六歲膂力過人進食不異九十七始生子遂無影唐  
有李元燧者百三十六歲開元東封太原于伯龍一百二十

按史記五帝  
本紀注云帝  
嚳在位七十  
年百五歲  
蓋帝嚳高辛  
氏也而其為  
六十三者  
未詳

又按史記殷  
本紀云外丙  
即位三年崩  
立弟中約四  
年崩立太丁  
之子太甲立  
三年不明暴  
虐不遵伊尹  
放之於桐宮  
且嗣太甲者  
沃丁也太庚  
小甲雍已皆  
在其下  
又按襄三十  
一年當作十  
二年襄公十

八歲宋党翁百七十餘歲譙定百三十歲瓊州楊叔連百二  
十二父宋卿百九十五九世祖不語不食不知其年又云竹  
書紀年所載諸公之壽有可攷者顓頊三十一歲產伯鯨又  
四十八年而陟為高辛氏六十三歲又至堯六十一歲而鯨  
治河年百七十二歲矣堯六十九年而黜蓋百八十歲也桀  
十七年商使伊尹來朝三十一年桀亡又十二年湯崩湯與  
尹年相等外丙元年小庚五年小甲十七年雍己十二年仲  
壬四年太甲元年伊尹放太甲桐宮七年而伊尹亡距湯亡  
三十餘年計尹之壽亦可百三十矣紂三十一歲西伯得  
尚以為師年八十又二十一年而紂亡又五年而武王陟又  
三十七年而成王陟康王六年而太公薨壽一百五十二也  
吳地記諸樊在位十四年餘濟十七年餘昧二十一年餘十

玄同放言卷三中 ○唐山入壽

仙鶴堂梓

二年經云秋九月吳子射卒左傳云秋壽夢卒是也襄公在位三十一年昭公三十二年定公十五年襄公二十年至哀七年通計七十四年也又按宣二年當作宣十五年考左傳橋如以文公十一年冬十月死且其弟榮如簡如以桓公十六年被殺焚如之被殺亦見文十一年傳杜預云榮如焚如之榮榮如以

魯相公十六年死至宣十五年一百三歲其兄猶存傳言既長且壽有其於人說亦有謬也五考訂者

三年閻問在位二十年夫差二十三年夫差將敗之數年延州來季札救陳去讓國之歲不下百年則三代人臣之壽未有如四公者也然改左傳壽夢卒襄三十一年去哀七年實七十七年身其三公紀年改之正史未盡合然要之在百歲外也といふ五雜組卷中亦あり考あり大抵宛委餘編と同トミ中記此より彼ありものと抄出を晋趙逸二百歲梁鄱陽忠烈王友僧惠照至唐元和猶存二百九十歲金完顏氏醫老二百餘歲又云山東濟寧州民王士能生元至正甲辰至國朝成化癸卯已一百二十歲行止如常後不知所終國初茹文中亦百餘歲近時閩中林大守春澤公亦百餘歲永樂中楚一盜魁年一百二十五歲尤為可恨也五雜組人提要これ唐山中三百歲子近死ありこれも數代同名とせん宛委餘編又云鄭滿

長狄僑如之弟焚如蒲如以宣二年攻齊衛被殺計其時僑如當四十餘歲矣又一百二年而僑如死於魯東門壽亦將百五十矣魏拓拔主稱神元帝者百四歲高麗王康年百餘吐谷輝王夸呂即位後自稱可汗者百年皆夷狄主也宋史日本國云云今按之梁書蕭昱傳昱附田舍有女人夏氏年百餘歲云云列傳孔子家語篇孔子見榮啓期段榮啓期年九十五又見列子天瑞說苑雜言細子攷索此の類を洵あるべし嘗國史を檢せし百歲已上の老人の此年とあるものありし四人を得たり天武紀十四年十月癸酉朔丙子百濟僧常輝封三千戶是僧壽百歲紀書二十九先是見二十一年十月條下蓋重續紀桓武紀天應二年七月壬寅松尾山寺僧尊饒生年百一歲請入内裏位大法師優高年也延曆九年十月丙午召高年人道守臣東人

玄同放言卷三中

百歲已上

仙鶴堂梓

於内裏引見時一百二十二歲一本作一百一十二歲其駿尚多聰如少年矜其衰邁賜之衣被卷四續後紀承和十二年正月乙卯云云是日外從五位下尾張連濱主於龍尾道上舞和風長壽樂觀者以千數初謂鮎背之老不能起居及于垂袖赴曲宛如少年四座僉曰近代未有如此者濱主本是伶人也時年一百十三自作此舞上表請舞長壽樂表中載和歌其詞曰那那都義乃美與介萬知倍苗毛毛知萬利止遠乃於幾奈能萬飛多天萬川流卷五十三年二月戊辰召外從五位下尾張連濱主於清涼殿令奏舞于時年百十四帝矜其高年授從五位下卷六是漢の文帝此時の樂人竇公と相似る老翁多べし百歲以下九十歲以上も亦稀なり續紀孝謙後紀神護景雲二年冬十月壬戌授無位村上乃自女從五位下時年九十九優高

年也卷三扶桑略記後冷泉天皇寬德三年是年改元永承丙戌正月十八日右大臣藤原朝臣實資薨年九十歲卷九永承八年癸巳六月十一日從一位倫子薨年九十歲閔白左大臣母氏也卷同康平六年癸卯六月廿六日前大僧正明尊入滅年九十三兵庫頭泰時子也卷同堀河天皇本書題書寬治二年戊辰正月十日戊午左大臣源朝臣俊房率卿相待臣等參入三井寺常行堂為修故高倉此下從七位源氏之七七法事也前中書王具平親王女宇治入道大相府家室也去年十一月廿二日逃去年九十三矣卷三增鏡老の波弘安八年二月晦北山准后九十歲是日算賀わりの抄錄於本書也又年齡定るは極老の人とかほきし顯宗紀元年正月云云是月詔曰老嫗名置伶僇羸弱不便行步宜張繩引紐扶而



東鑑卷十二  
建久二年二月五日古左  
典統後朝の  
乳母字、麻季  
麻季、句、年九十  
ニ、の、離、合、愛  
哀、粗、置、目、ハ  
仰、り、の、一、條  
後、ハ、考、得、た  
ま、ハ、追、書、ス、

出入繩端懸鈴無勞謁者入則鳴之朕知汝到於是老嫗奉  
詔云云二年九月置目老困乞還曰氣力衰邁老嫗虛羸要  
假扶繩不能進步願歸桑梓以送厥終天皇聞惋痛賜物千  
段逆傷岐路重感難期乃賜歌曰云云書紀文武紀四年春  
正月癸亥有詔賜左大臣多治比真人鳴靈壽杖及輿儻高  
年也續紀廢帝紀天平寶字六年八月丙寅御史大夫文室  
真淨三以年老力衰優詔聽宮中持扇策杖續紀九十九  
歲前後の人ありこの它古記録を涉獵ありあはれ歎後よく考へるわらわ  
後集追書は余嘗て年九十に至る老嫗を賢あるを考へ賢あるは  
衛武公よおれを於國語上楚語左史倚相曰昔衛武公年數九十  
有五矣猶箴傲於國曰自卿以下至於師長士苟在朝者無  
謂我老耄而舍我必恭恪於朝朝夕以交戒我聞一二之言

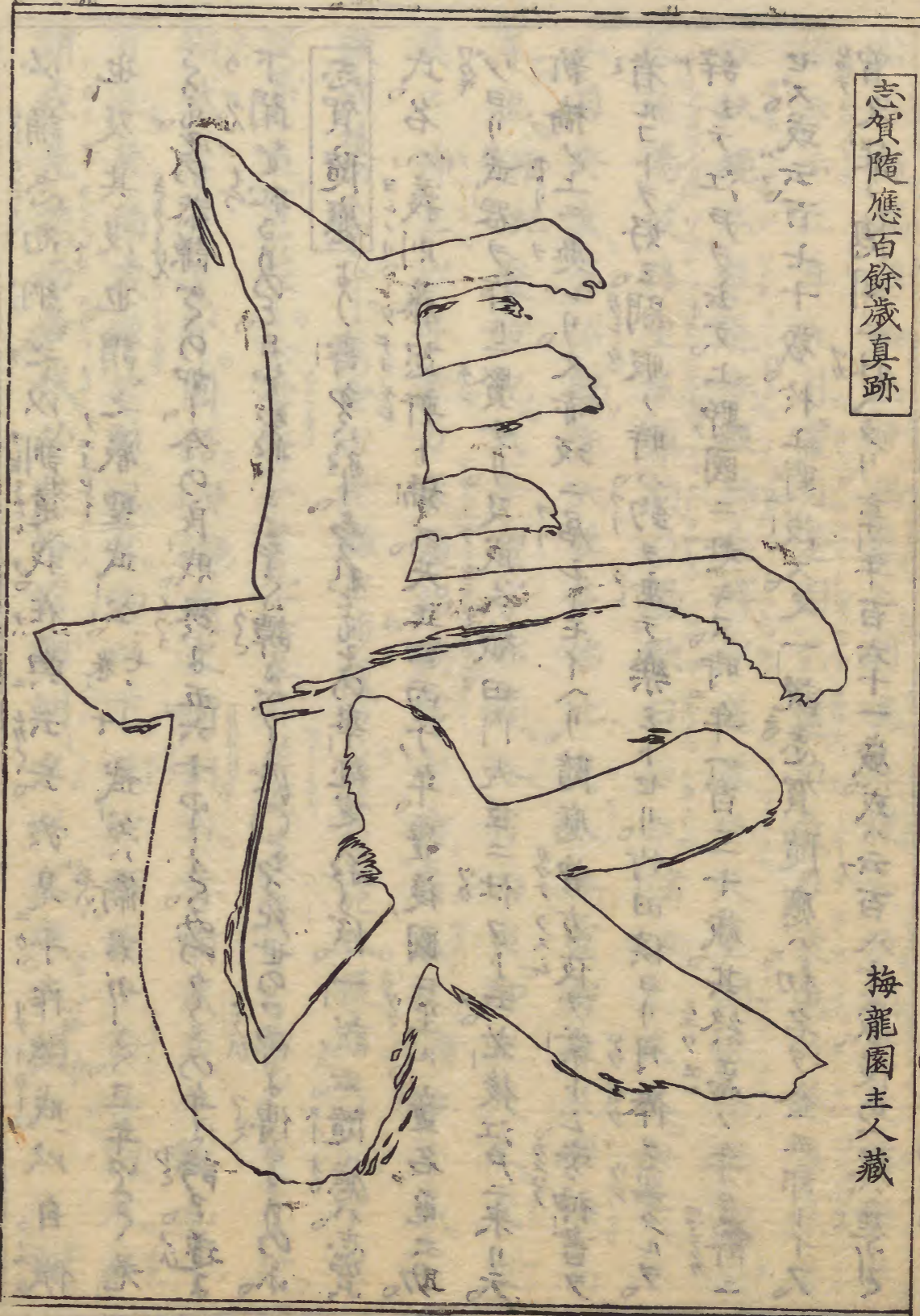
必誦志而納之以訓道我在輿云云於是乎作懿戒以自儆  
也及其沒也謂之獻聖武公卷十武公ハ衛君ゆゑ且年ゆゑ老  
るもその恭謙がくの如し今の良賤終る五六十年みづから年を誇り遂に  
下聞を恥るものと日をおれどうも譚るべからぬ○ちり世の口碑は傳るもの  
志賀隨應より壽ありあはれどもその事迹定るべからぬ一説云隨應ハ志賀  
氏名ハ義則藤怒軒ト號ス天正四丙子年豊後國ニ生ル童名龜之助  
少ヨリ武器ヲ作ルニ賢ナリ及成人織田内大臣ニ仕フト云老後江戸ニ来リテ  
新橋ノ上ニ處レリ又赤坂ニ居シトモイヘリ隨應曾方伎ヲ業トシ旁神書ヲ  
看ルコトヲ好ミ閑暇ノ時ハ釣ヲ垂テ樂ミトセリ竹田侯ヨリ月俸ヲ稟タルヲ  
辞シテ江戸ヲ去テ上野國ニ赴キ又時年一百三十歳其終馬ノ年ヲ詳ニ  
セズ或云百七十歳於上野没ス又一説志賀隨應ハ初名ヲ金五郎トイフ  
曾久能ノ摠閑ニ仕ヘタリ享年百六十一歳或ハ云百八十歳後の一説ハ鹿ノ

玄同放言卷三中

○隨應

仙鶴堂梓

志賀隨應百餘歲真跡



梅龍園主人藏

〇八

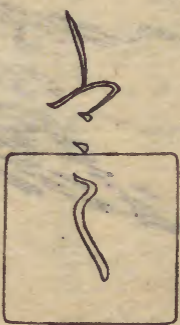


玄同放言卷三

〇隨應真跡

仙鶴堂梓

藤忍軒志賀公隨應百有餘歲



弥、疑ひあり、猶よく考へ、追て考へべし。昔偶其凋菴翁草を閲せし、生嶋幽軒  
老人七十の筭賀は、七、叟来會せり、志賀隨應也、亦其一人か、といへり、隨應が  
墨跡ハ好事れ家、鍾馗せし、偽筆多かり、その蹟のふれと、その詞句は赴  
あつてハ贋作之余、視を歴する中、梅龍園主人の所藏、是真跡あり、影寫して  
右よ出し、百有餘歳とあり、な、そのころとぬれども、年と隱をハ、老人の情こころ  
百幾歳と、定ふハ、署せざるありん、又この老人の墓ハ、江戸愛宕下天徳寺北地中なる、  
不断院に在り、墓誌ハ云云と、豫く、一日興継とぬく、不断院は

赴たつ、その墓所をわちめ、半日あまり、索し、竟もその墓あるを、困り果て  
布施と畏れ、寺僧に請く、過去帳を披閱せよ、享保十五庚戌年と題せ、條下  
なる、許多の戒名の中、

真月院諦念隨翁居士

志賀隨翁

六月十六日

施主上野恕信

とあり、この墓今なわあり、寺僧もあつた、今ハその施主絶たれ、總墓の中に  
ゆわ、ゆわ、え玉へといふあり、寺門を望み、總墓所、天徳寺本堂の左、攀登り、  
興継もろ共、歩つるほろり、ハ、彼此をえぬ、さ、亦あり、より、復  
興継を寺に遣して、案内を乞せ、道人總墓所を来て、こが寺に諸檀の墓所、あ  
とく指し筋を、又ひつる、索ね、其処、彼墓あり、その施主あり  
形、墓石も共、壊れありん、と、や、や、決る、比ハ卯月のあはれ日、を、  
そ、消し、現寺の過去帳、ふ、その戒名あれ、ち、比、彼、墓ハありん、



二十六日没満百歳也。時人傳二卷中、亦是を載り、別號ハ倚松庵、京師の人、その祖と榮基といひ、父を既在といひ、寛文帝御在位の時、寛文四年丙辰、專齋を召させ玉ひし、この日專齋は歌杖を賜ひたとあり、傳へり、余は歌杖を摸し、助老一枚を藏む、時人傳ハ、蓋簪録を引て、鳩杖、銀絹、茶酒を賜ふといへり、又その修養の方を問せ玉ひし、は嗜慾食餌一切些を断ると答へり、しるすといへり、ある物中ハ、こゝろを今大路道三のりとも、故より兩説を併ね、不審あり、れども、筆に載るもの稀し、と細考する由なり、こゝろハ、まゝに世の人、近日余が視聽を經し、此亦三人あり、**三河百姓満平**ハ福艾の父である、此東岡舎筆記云、三河國寶飯郡水泉村ノ百姓満平、慶長七壬寅年、右同國同村ニ生レ、寛政八丙辰年、百九十四歳ナリ、享保年間云云ノ慶賀ニヨリ、徴レテ江府ニ参レリ、迺白髪ヲ献セ、御米若干賜フ、一説ニ月俸ヲコトシ賜フトイヘリ、今茲丙辰年、復マ井レリ、享保ノ故事ノ如シ、前後イヅレノ日ニハ、吏人満平ニ問ク

汝が家、何ノ術アリテ、長生如此ナルヤ、答テ言、他ノ技ナシ、僕ガ家、先祖ヨリ相傳メ、三里ニ交ス、其灸方、毎月朔ヨリ八日ニ至テ、輟ム年中、月別ニ間断アルコトナシ、其數同ジカラズ、如左、

- 右朔 八日 九日 十日 十一日 十二日 十三日 十四日 十五日 十六日 十七日 十八日 十九日 二十日 二十一日 二十二日 二十三日 二十四日 二十五日 二十六日 二十七日 二十八日 二十九日 三十日
- 左朔 九日 十日 十一日 十二日 十三日 十四日 十五日 十六日 十七日 十八日 十九日 二十日 二十一日 二十二日 二十三日 二十四日 二十五日 二十六日 二十七日 二十八日 二十九日 三十日

寛政八年、満平百九十四歳、妻名氏百七十三歳、子名氏百五十三歳、孫名氏百五歳、曾孫以下、尚百歳ニ満ガルモノ多クアリト云フ、或ハ云、満平ガ敷地ニ靈水アリ、其井底、悉辰砂ナリ、古来ヨリ、コノ水ヲ汲用ル故ニ、一家カクノ如ク長生ストイヘリ、但コノ事傳聞ニアリ、虚實ヲ詳ニセザレバ、異聞ナルヲ以録ス、と、このとき當年余が、これなむ次ハ伊勢ノ長命寺、住持禪修法師ハ、文化壬申年、その壽一百十九歳あり、傳云、伊勢國渡會郡内城田郷、長原村、慈光山長命寺、曹洞宗、同郡田丸宮古村、廣泰寺、末院也、本山ノ住持禪修法師、廣泰寺、於伊勢、為南方曹洞宗一派、法頭者。

玄同放言卷三中 〇満平禪修 仙鶴堂梓

初名善修、最後ハ土佐國土佐郡高知蓮地町蓮地之地、悞ノ人ナリ、俗姓、改善為禪云。加藤氏父ノ名ハ文右衛門、禪修ハ元祿七甲戌年ヲ以生レタリ、乳名及祝髮ノ年詳ナラス、尾張國春日郡大草村福巖寺ノ白庭和尚ヲ師トスト云フ、明和三年甲申、是年禪修七十三歳、田丸廣泰寺ノ末院、上管村永福寺ニ住持ス、後ニ中角村教勤寺及大野木村宗善庵、棚橋村寶光寺等ニ轉住セリ、天明四年甲辰、五年乙巳、二介年、長原村長命寺ニ看住シ、六年丙午ヨリ住持ニナレリ、是年九十歳也、文化三丙寅年、國君恩命アリテ、月俸ヲ賜フ、長原村、隸田丸領、乃南紀御領也。是年禪修百十三歳也、滿百歳ナレバ、月俸ヲ賜フベカリシニ、田舎ノ福院ハ住持ノ極老ヲ嫌フニヨリ、年ヲ隱シテマウサ、リケルトゾ。稀ナル壽僧ヲ優シ玉フナルベシ、コノ時禪修、冥加ノ為ト稱シテ、自筆ノ行書一頁ヲ獻リキ、先例アレバナリ、イカナルコトヲ書タリケン、詳ナラス。九年壬申、下人雜司料トシテ、銀若干年、別ニ賜フベシト、再テ恩命アリケリ、是年禪修百十九歳。

十一月日遷化セリ、其稟性質朴寡欲ニシテ、物ニ拘ラズ、只酒ヲ嗜ミ、又豆腐ヲ好メリ、ヨリク其本山廣泰寺ヘ赴クニ路程二里餘リナルヲ物トモセズ、足駄ヲ穿ツ、往返シケリ、其出ル毎ニ、ミヅカラ一瓢ノ酒ヲ携テ、中途ニ獨酌セザルコトナシ、文雅ノオアルニアラザレバ、其壽ヲ愛テ、書ヲ徵ルモノ多カリケレバ、拙キマ、ニ位置ヲ得タリ、コノ它聞エタルコト無トイヘバ、抑亦一奇僧ナラズヤ、以上略傳、今詳云、余曩、松坂有友人三枝園、禪修の書一頁を惠る、あどりて、長原村、壽僧あつとを知らり、よりて三枝園を勞煩し、此略傳一編を得たり、余がその所藏の一行書ハ、唐紙半頁、明月拂、風と大書して、落款善修とあり、印文も亦、長命主人、善修とあり、善修への初名といハ、このとたのまご改名せり、あ、あれども文化八年の筆、その明年遷化せられ、既善と禪と改められ、かかる物、な、な、舊名を署せ、あ、ん、その物、拘り、と、素撰、る、る、足、ま、う、愛、ま、死、程、の、蹟、あ、わ、ね、と、稀、多、壽、僧、の、肉、筆、あ、れ、バ、と、の、落、款、を、影、写、し、

文化八  
 百十八番辰  
 辰  
 辰

右より左にあり、この老法師、住持の寺を長命といひ、その村を長原といひ、誕生の地を高知といひ、その師を福巖といひ、本山を廣泰寺といひ、且その初住持の寺を永福、宝光の瑞あり、妙あり、皆是名詮自性なり、福壽永延の奇僧といふべし、あまのつなを傳聞とまぬれ、江戸本船町、武助、與右衛門が食客七兵衛、文政元戊寅年、その壽一百歳なり、九月十二日、御米拾俵、錫杖、稀あり、高年

石川文山翁  
 享年九十歳  
 寛文十一年  
 壬子夏五月  
 廿三日没、又  
 崎人傳あり、  
 馬叔老人又  
 下村道瑞の

あまのつな、又、清圓尼、百十四歳のま實あり、清圓尼ハ大石氏良雄の女主親、良金の妹ありといふ、ま實の傍にえひつ月系、大石の雄娘、百十四才信女と署あり、原是、菽生氏の所藏とぞ、関書家思亮、模刻し、その捐本を同好に贈り、ま實の文化癸酉の春あり、余もこれを獲く、雜画帖に貼し、但ま實の授受の年月ハ今詳あり、ま實、余聊疑ひあり、清圓尼、果して良金の妹あり、元禄壬午、云云のま實より、ま實ハ尚十歳前後あり、この年と十歳の時と推つり、文化三丙寅年、至て百十四歳あり、遠くもあまのつなあり、ま實を遺せ、年月の今詳あり、ま實を不審、姑く聞見の隨に録し、後考を俟つ、九十歳以上の、堀部金丸の女、妙海尼、安永七戊戌年、九十三歳、ゆく遷化、ま實の墳墓ハ芝泉岳寺、墓所の門傍あり、墓誌ハ、清浄菴、寶山妙海尼、堀部弥兵衛金丸娘、行年九十三、安永七二月二十五日、よまのつな、四行、ま實、余が相識親類に三人あり、武藏、國崎玉郡、志多見の村、長松村、生ハ、世稱、佐左衛門、安永中、没時、九十三歳、余が祖父の外祖母、智昌院ハ、寛延三年五月

五十六歳と云ふ。その終焉の年月詳かた。又沙門は九十歳迄あり。其の多き。多し。

十日没す。時九十六歳。又余が祖父の女弟真中氏名ハ喜津ハ下總河津間の郷土藤沼太郎兵衛の後室あり。其の子ハ亦太郎兵衛と名づく。寛政己未年没亦九十六歳也。武藏川口村の子狂吟に至りて。この它巷説風聞を取らば。多かるべし。○宛委餘編は公卿大夫の百歳以下八十歳以上あり。と考へ。多く載る。今又贅せ。又按ま。唐の會昌五年三月二十四日白居易尚菑會中の七老前懷州司馬安定胡果年八十九尤長。刑部尚書致仕白居易年七十四尚少。此の它。吉岐八年八十八。劉真八年八十七。鄭據八年八十五。盧真八年八十二。張渾八年七十七。會中遺老李元爽年百三十六。禪僧如滿歸洛年九十五。これと唐の九老といふ。見九老詩。天朝の尚菑會ハ古今著聞集。文学部云尚菑會ハ云云。貞觀十九年三月十八日大納言年名卿小野山莊中。又安和二年三月十三日大納言在衡卿粟田口の莊中。その後天承元年三月廿二日大納言宗忠卿白河山莊中。

被行多。七叟の算三善為康。年八十三。前左衛門佐基俊。七十六。前日向守中原廣俊。七十。亭主。七十。式部大輔藤原敦光朝臣。六十九。右大辨實光。六十三。式部少輔菅原時登。六十二。この中基俊ハ病より。詩を贈り。時登序書。垣下ハ中納言師時以下侍。云云。貞觀安和前後尚菑會の詩此序ハ本朝文粹。卷九。前序ハ菅相公是善。後序ハ菅三位文時。の作。菅三品尚菑會詩序云。文時少於樂天三年。猶已衰之齡也。これハ菅三品當年七十一歳。日本紀略卷七。天元四年辛巳九月八日。後三位式部大輔菅原朝臣文時。年八十三。諸日本紀略。冷泉安和二年三月十三日庚寅。大納言在衡卿於粟田莊有尚菑會。七叟各脱朝衣著直衣。指貫希代之勝事也。是件の後會。宋の至和三年丙申秋。是年改。睢陽五老司農卿致仕。畢世長九十四歳。禮部侍郎致仕。王渙九十歳。自餘の三老。杜衍。朱貫。八十餘歳。見五老圖詩。元豐五年正月。著英。



會中の十二老年八十に至るの如く皆七十許歳のとき中司馬光六十四歳  
 尤少と云見十二老詩并司馬君實者老會序國は黄耆の得るに如く如く齒は寔は貴き  
 のよかんあつともいふ人壽百年を有るに猶學べども聖に至りては且上  
 壽ハ稀ゆとく下壽るめく多るの猶賢者ハ寡く不肖者ハ衆なり故に  
 列子楊朱載揚朱之言曰百年壽之大齊得百年者千無焉  
 莊子盜跖亦曰人上壽百歲中壽八十下壽六十除病瘦死  
 喪憂患其中閑口而笑者一月之中不過四五日而已矣と  
 不過六十と下壽といふは五十八下壽あり後世修養之方廢とく  
 より七十古來稀の句あり遂は五十とあり壽の大齊と亦悲くも又  
 知つといふはききあり人の算賀は四十を不惑といひ五十を知命といひ六十を  
 耳順といふともあり六年と數へく四十と云云五十と云云六十と云云といふ

とのわらわらぬごとく不感知命ハ聖人ハ限り九夫年四十を感ざるめ  
 あらんや五十なりとていつく天命を知るべしと只その年とわらうとみづから聖  
 智ち比ひ方方ハ自負の甚しむなり人心各異なりとの情はわらわらハ壽福の  
 樂ねむむあるも彭祖も死し鳴子も死せり數百の壽を有とも將死と死と此  
 一日を惜むの哀と老少異あるとたうべし既よこの生を得たり孰るその死を脱る  
 べからざるを不死といふのあり毗騫國の長頭王是あり梁書卷五列傳四八十  
 諸夷傳云扶南國在日南郡之南海西大灣中去日南可七  
 千里在林邑南三千里云云又有毗騫國去扶南八千里傳  
 其王身長丈頭長三尺自古來不死莫知其年王神聖國中  
 人善惡及將來事王皆知之是以無敢欺者南方號曰長頭  
 王云云國法刑罪人並於王前噉其肉國內不受估客有往  
 者亦殺而噉之是以商旅不敢至王常樓居不血食不事鬼

玄同放言卷三中

〇上壽知命長頭王

仙鶴堂梓

神其子孫生死如常唯王不死扶南王數遣使與書相報嘗遺扶南王純金五十人食器形如圓盤又如瓦壺名為多羅受五升又如椀者受一升王亦能作天竺書書可三千言說其宿命所由與佛經相類是失歸の妖欬と信するなり亦異聞也長頭王の御梁書より先晋宋二書よりありと云ふ梁書ハ今見ず臂よりあり便宜に任しく抄録しその文異なりと云ふなり

第三十三事

尼妙圓妙圓石地藏圖

武藏國多磨郡金子村甲府の多高井土石原兩驛の近新造の石地藏一軀立りあり金子村あり妙圓と云ふ尼が建立せしといふこの妙圓ハ酒井村新田あり百姓六右衛門云云六右衛門之丞云云女あり俗名を熊と云ひり六右衛門は云子あり長女ハ熊ニ二女律ハ猶六三郎といふ寛政の初森田屋与五右衛門といふの熊を乾女俗に云ふと云ふ金子村あり百姓新助初名ハ妻せりかくて男兒を産するその兒新五郎後尚幼少あり時丙辰年十一月月廿三日良人新助ハ身ありり又彼新助ハ村あり百姓

倉田伊右衛門が族へ享保年間故伊右衛門その弟新助が分家しりり新助が子四五右衛門四五右衛門が子ハ熊が良人即後の新助あり熊ハ良人を喪ひり世よりその子の名を稚兒と携り亡夫の弟ありり何り男子適年よりさる程は病づらあり久ありり兩眼竟に失われハ竊に感悟ありあり尾よわんとせり決り後夫よ告り離別しりかくてその乾親俗に云ふ親と云ふ与五右衛門の祝髪のみを相譚よ与五右衛門も亦感て禁を深大寺村の深大寺天台ハそれ菩提院ありり住持よ告り剃度を請ふ儻に許さるるもあり後又村長よ告りこれ保人とありりうやうやう薙染の志願を果しりり壽量妙圓と法名せりり妙圓が前夫新助が墓ハその子新ハ家のほとりあり田圃の畔増あり覺量休夢信士寛政八年云云と云ふ妙圓法尼と云ふ妙圓法尼ハ其の墓ハ合葬せりり舊の墓誌ハ推知る壽量妙圓法尼と云ふと云ふ妙圓法尼ハ其の墓ハ合葬せりり舊の墓法名在世刻せりりこれらハ華山子後かの村の村の同擊しりり後夫ハ俱に發心し剃髪しりり村人ハ憐れりり此妙圓ハ俗に云ふありり村中より巡り券縁はくもありり村人ハ憐れりり此妙圓ハ俗に云ふありり毎日驛路の上より

鉦をたて念佛を唱る程路ゆく人の投與する錢を多く數まると三貫文ありしなり  
 この後又方金二方と錢二貫をゆりこの金錢をりて石像の地藏菩薩を造り  
 せんとせしふよと五右衛門伊右衛門ホその身を助つて程もあく落成せ即街  
 道の人家離れる間居たりし妙圓欽びく毎日石像のほろり侍り鉦を  
 敲き念佛のく憐れし程武藏の日野の新法寺天台糟谷村の正忍寺  
天台の西住持の近郷ゆりて大徳あり此の西僧一日妙圓は地藏の画像各一を  
 授けりゆり汝このみほけをよ念く人の為に加持せよか深信念らば必應驗  
 あらんぞと毎月四日八日十四日廿四日の四日ハ禱るとも效なり自餘の日ハ障  
 碍ありし人その念佛の功德り人の病苦を救ふとわらわれば修行者かを  
 叮嚀に教示せしむこの身を傳ふ人の試よその加持を受るは應驗ありと  
 して形その呪法譬難産のよけを中々地藏あり何がが妻よ安産せよと玉ひ糸  
 南無阿弥陀佛南無阿彌と唱るのよやく立地は安産とよの他何まれとの  
 〇十七

妙圓石地藏圖

寫真

武藏國多磨郡金子村人家をわける間  
 板橋のほとり立江戸よりけ右のこにあり



高廿二尺許

高廿一尺許

佛像ハ石中ニ半體を彫出せし面目磨滅  
 都く圖の如し石ハ總高廿三尺許との四面ハ  
 籬笆あり後ニ造りしと見えあり

今もどりて錢をよめりしもの  
 餅をのりて供するものあり錢ハ  
 そのほとりありて祀りしとひ果  
 子ハ小兒輩がものと見えあり

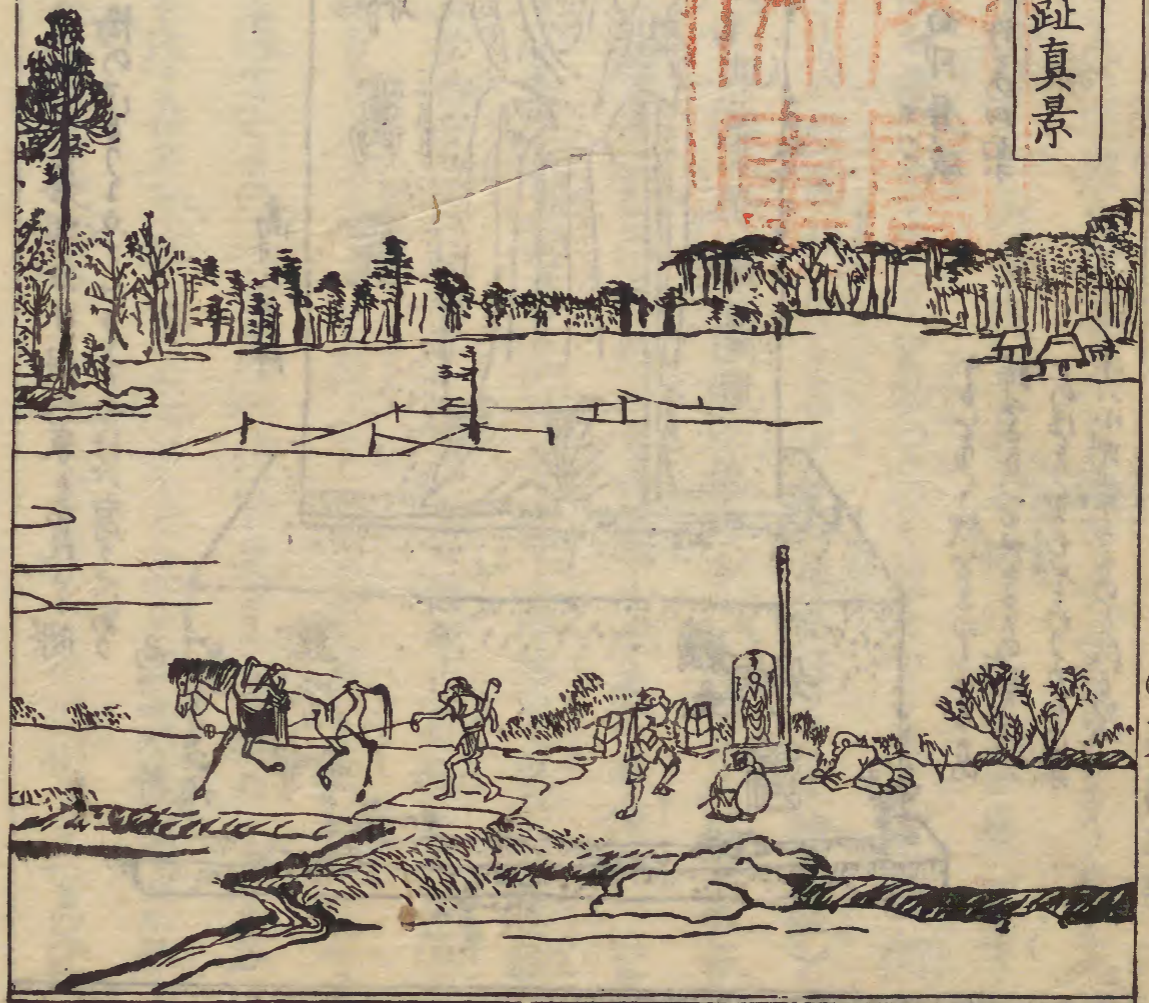
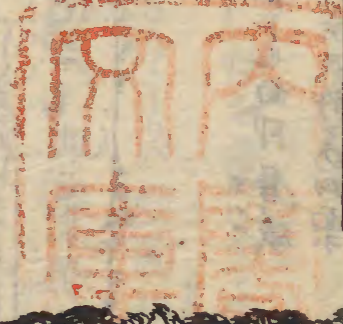
玄同放言卷三ノ中

〇妙圓

仙鶴堂梓

金子村妙圓常念佛遺趾真景

己卯夏日。渡邊華山子。為余之著是書。躬趣于金子村。寫其真景。者即此。雖未足以為奇。然彼我用心。出於勸懲。若夫緇流。口說法。而行不依律者。披閱是書。肇知有彼尼。據是地圖。以詳其事蹟。則欲無羞。可得乎哉。華山子有感于茲。畫成之日。徵余書於其上。層余云。阿含經不云乎。盲龜浮木。百年猶難值。益人間為苦海。眾生為盲龜。浮木即菩提也。若



〇十八

彼妙圓。盲又盲者。而獲難得之浮木。大凡若是。因緣。不可言。唯以意可贊也。因錄於徵書記。草根集第八所見之歌。以塞笑云。

玄同居士 〇四

妙圓が墓の  
この藪の  
あちには  
田畑の畔に  
あり



華山一画

玄同放言卷之中

〇妙圓

仙鶴堂梓

所願のまゝに唱へ、地藏菩薩に祈請し、念佛の外、他事あるは一切成就せざる  
 とす。かく移ひて年を経く、いぬ丙子の春、比よりあふりあれがごとく加持をせざらん  
 いう形、故を問は、吾儕明年の冬、十月廿八日、念佛往生の素懐を遂げ、  
 猶加持をせむ。志願の妨ならずと、理あり、みねその意は任まらば、  
 なる難産あり、強くとの加持を請ふ。必應驗あり。かく丁丑の秋、妙圓ハ  
 所得の銭八九貫文あり、葬具を買んとし、村人ホ、その死期を告ぐるを  
 まると、ハ、  
 棺經るなり、  
 かつ月廿二日、ハ、与五右衛門が親の速忌、當り、  
 食せざるは、  
 うち我はともや死ぬと、  
 世の暇とせん、  
 なくうち巡りて別を告且、  
 日、

妙圓ハ浴をまほし、朝より湯を沸し、あろぬるもの、  
 垢を流し、  
 えんと知り、  
 身を倚り、  
 村人ホと集合、  
 絶る、  
 あ、  
 愛く、  
 功徳を感嘆せ、  
 方金云云、  
 識者云、  
 史あ、  
 丁丑の冬、  
 余、  
 日、

金子村よむは、彼妙圓は由縁あり、与五右衛門はこれぞなり。むろゝ念佛の行者、  
 熊谷直實入道のゆゑ、豫よりその死期を知り、示寂せし多かり、又よは高僧といふや  
 中も、あつゝその死期を知らず、妙圓は無智の盲尼なり、何の故よその加持は應驗あり、又何よ  
 ありと、その死期を知覚し、その死期を疑ひ易く、曉かすありて益を乞ふといふ  
 余が云人の死期をいふるを、我獨るべきまわ、後と問れ、答は、人の詮は死に似  
 うり、聊足下の疑いと釋ん、彼妙圓が死は俗中をこえ、念佛の功德といふあり、これを  
 念佛の功德とせれば、寔は念佛の功德なり、あれども、虚静は道德の至りあり、徳  
 こも、明なり、唯念佛の功德とのとよべり、智を祛、徳を禁め、一を抱く  
 離るべし、已を虚せば、佛名を唱はとも入我、妙圓は、渠は無智の  
 匹婦なり、且盲目なり、心素より智術なく、眼は色相、件々の物をほるる故、移る  
 あつゝ、道心をもく、堅固こそ、虚静あり、故に人の為は、禳へば、應驗あり、その寂  
 滅を樂し、豫より死期を知り、その知るは、知るはあり、知るは、知るは、知るは、知るは

知るもの、則習の性とあり、苟その心虚静あり、思邪なき、思邪なきもの、則  
 聖人の心あり、所云虚静は、荀子、卷之十五、解蔽篇云、何以知道曰、心、心、何  
 以知曰、虚、一而静、未嘗不臧、讀也、孔子家語、卷、好生篇、孔  
 子曰、舜之為君也、其政好生、而惡殺、其任授賢、而替不肖、徳  
 若天地、而静、虚化、若四時、而變、物是以四海、承風、暢於異類、  
 韓非子、卷、主道篇云、道者、萬物之始、是非之紀也、是以明君、  
 守始、以知、萬物之源、治紀、以知、善敗之端、故虚静以待、令名  
 自命也、令事自定也、虚則知、實之情、静則知、動者、正とあり、  
 らの數語ハ、竊は老子經より、由り、老子、第、十、章、云、致、虚、極、守、静、篤、吾  
 以、觀、復、夫、物、之、芸、芸、各、復、歸、其、根、曰、静、是、謂、復、命、復、命、曰、常、  
 知、常、曰、明、不、知、常、妄、作、凶、と、是、之、莊、子、五、卷、天、道、篇、亦、曰、聖、神  
 之、静、也、非、曰、静、善、故、静、也、水、静、明、燭、鬚、眉、平、中、准、大、匠、取、法

玄同放言卷三ノ中

○静虚論

仙鶴堂梓

焉。又曰。夫虚静恬淡寂寞無為者。天地之平而道德之至。故  
帝王聖人休焉。とひひ同意之道。至微中。心欲作。一  
甚危。故虞書大禹謨云。人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允  
執厥中。とひひ亦老子第十。載營魄抱一。能無離乎。專  
氣致柔。能嬰兒乎。滌除玄覽。能無疵乎。愛民治國。能無知乎。  
無知。林本。とひひ。營魄の魄。精魄即經營之抱。一。谷神之無離乎。を  
中庸。道也者。不可須臾離也。可離非道也。とひひ。嬰兒  
亦谷神。譬。滌除。洗煩想。玄覽。觀念。而視之。の処。王註。林註。  
送。異同。蒙學の爲。今愚意。略解。先儒の説。大禹謨。後  
人の偽作。とひひ。仁齋の中庸發譚。據る。荀子。解。云。昔者舜之  
治天下也。云云。故道經曰。人心之危。道心之微。揚涼注云。今  
虞書有此語。而云道經益有道之經也。云云。この注非。荀况の

所云道經ハ道家の經あるべし。大禹謨の舊本ハ人心云云の語ハ  
知。朱熹亦これと中庸の序を引く。且云。心之虚靈。知覺一而已  
矣。虚靈ハ水の静。明。鏡の如く。荀子は虚一而静と  
ひひ。虚靈不昧。唐譯の大智度論に出。櫻陰齋談大疑録ホ。みねを  
儒の文字あり。荀もあ。譬。佛語あり。奚。孟軻。揚墨を排斥。其の書ハ  
墨翟の語と載。この前。故意雜の記。揚雄亦莊周を排斥。其の書ハ莊子を  
引。揚子法言問道篇。論。莊周。鄒衍。曰。至周。周。君臣之義。行。無。天地之  
間。雖隣。不。也。問。明。篇。曰。武。問。將。讓。天。下。於。許。由。取。有。諸。曰。好。大。者  
爲。也。顧。由。無。求。於。世。而。已。矣。又。曰。好。大。累。兼。父。灑。耳。不。亦。宜。乎。諸。好。大。者  
兼。也。荀。子。の。寓。言。は。又。曰。鶴。朋。冲。天。不。在。六。翻。手。技。而。傳。尸。鳩。其。累。矣。  
夫。并。卷。之。五。見。を。鶴。朋。小。大。の。辯。ハ。列。子。は。を。莊。周。潤。色。道。遊。は。を。  
これ。由。て。觀。れ。孟。揚。二。氏。と。釋。教。中。國。は。入。の。後。在。の。書。ハ。佛。語。を。取。る。と  
あ。ん。故。これ。亦。知。る。無。用。の。道。ハ。成。難。一。離。れ。易。一。離。と。成。て。と  
辨。な。る。と。三。教。一。理。の。と。ひひ。揚。子。法。言。卷。學。行。篇。曰。百。川。學。海。而。至。于。海。五。陵。學。山。  
而。不。至。于。山。是。故。惡。其。畫。也。とひひ。人事。を。求。る。の。儒。者。の。  
求。これ。得。る。の。其。唯。顔。孟。欬。これ。高。遠。を。求。る。の。老。莊。の。徒。と。を。

玄同放言卷三中 ○静虚論

仙鶴堂梓







將基道これ徑房大輔判官種長郡司景家とせられ我家の運命なまつめ  
 とうさまで家のろ夫盡うらうと主上門院同一道よ御幸なりもくも空をあら  
 何國の浦何國の山此奥も御幸なり後の世にたてともあをせ□□□砂金やも  
 とうのこせせこのこまの中をたて入源氏と□□□もつて玉幹と惱ませまうん  
 ひろの□□□一門のあうふあういふあひ命あうもかほへを扱そ無氏のもれえうと  
 供奉さるわれと女院へうらちほけ給ひるうのそれうの火水の中まても供奉  
 まへまことかほへうらちほけなる心つう供奉し□□□れと福んうよか□□□せあれとも  
 昔候のそささくまをほのへも中をありうらちほけあひよんを力とあつてこの  
 へかまへてうらぬ主上典内侍徑房種長うらちのうら磯へ漕うこのふみ女院  
 大納言□□□當内侍阿房内侍基通景家のうらあへあへつひは世段  
 ちうのよもあひんのもや源氏うらちあひあの中も陸中もあひんうらちのうら  
 ちうへもあひ一門のへあひうらち海の中もうらちあひ二位あひの知盛

御のしはまよみま□□□けくはうのりあやうとせられ入とせうと御御  
 うらちあひのうらちあひ海へあひんうらちあひのうらちあひのうらちあひ  
 あくうらちあひのうらちあひ候□□□おをのそて佛の法名のうらちあひのうらちあひ  
 あひんとせうらちあひのうらちあひあひうらちあひのうらちあひのうらちあひ  
 まくうらちあひの女院の御舟へあひうらちあひのうらちあひのうらちあひのうらちあひ  
 典侍の玉うらちあひ主上あひせまうらちあひのうらちあひのうらちあひのうらちあひ  
 のうらちあひ景家うらちあひのうらちあひの中まかをせうらちあひのうらちあひのうらちあひ  
 云云これうらちの下三月廿八日は石見國をさうと潜幸なりあひのうらち五月三十日は但馬の  
 國府に近づれ十五日は能勢の長原といふ処より野間の郷へまうらちあひのうらちあひのうらちあひ  
 みちうらち先帝御惱のうらち七月二日ま至りうらちあひのうらちあひのうらちあひのうらちあひ  
 竟この里に潜せまうらちあひのうらちあひのうらちあひのうらちあひのうらちあひのうらちあひ  
 長月廿日あまうらち紅葉を御覽はうらち河合へ御幸ありうらち先帝の歌并は徑房



當時典侍と唱一女官多り。帥典侍ハ中山中納言頭房卿の女平大納言時忠卿の妻也。中宮御産の時、御侍乳は参りし。御乳人となり玉ひり。並源平盛衰記卷十五、一の御乳母あり。大納言典侍ハ平重衡卿の妻也。東鑑卷四より、盛衰記卷四、五條大納言邦綱卿の女重衡卿の北方の妹、先帝の御乳母あり。同書卷四、大宮太政大臣伊通公御孫鳥飼中納言伊實卿ノ御妹、五條大納言邦綱卿養子、本三位中将重衡卿北方先帝ノ御乳母也。といへり。前重衡卿の北方の妹といひ、阿房内侍ハ同書卷同、辨入道貞憲ガ女也。といへり。これども源典侍といひ人ハ所見なし。右將基道、大輔判官種長も未詳當時。関白藤原基通公あり。基道を基通とも書かれ、はとも同名の人歟。いひ、又平家恩顧の侍ハ景家といひ、飛驒守景家なり。盛衰記卷三十一、飛驒守景家、卷三十二、中、景家とあり。卷三十八、下、中、景経とあり。筑後守貞能、越中二郎兵衛盛嗣ホ劣。より、勇悍の老武者あり。檀浦の戦ひ。

景経も陣歿せし。同書より、同人といへり。彼書より郡司景家ハ受領何國の郡司なり。かへも不審なり。就中疑ふ。信じて死ハとの書を遺せし。左少辨藤原経房あり。何とあり。壽永元曆の間、辨官ハ経房とす。左大辨藤原経房あり。この経房卿ハ平族幼帝國母と扱とて都を落すと死。俱ハ西國へ多。都とも多。上皇。及後鳥羽の朝ハ仕。中納言と歴く。大納言ハ升進。正治二年閏二月十一日、年五十八。薨。源平盛衰記、卷三、法皇自天台山還幸、事段云、同日、壽永二年、院ノ御所ニテ議定アリ。左大臣經宗、中畧、左大辨経房、新三位季經、新宰相中将泰通、参ラレケル。同書、義仲行家受領ノ事、段ハ八月十日、法皇ハ蓮華王院ノ御所ヨリ、南殿へ移ラセ給フ。其後、三條大納言實房、左大辨宰相経房、参給テ、被行除目ケリ。同書、頼朝征夷將軍宣ノ事、段ハ、壽永二年八月日、左大史小槻宿禰奉ル。左大辨藤原朝臣、在判トゾ被書下ケル。同書、關官恩賞人々ノ事、段。

玄同放言卷三ノ中 ○經房 仙鶴堂梓

同元治十二月十七日云云可豫議奏入々トテ関東ヨリ交名ヲ注進ス右大臣

云云藤中納言經房云云也諸家大系圖第七藤原氏譜經房頭藏人

民部卿大宰帥正二位三事參議大辨權大納言母中納言俊忠女正治

二年二月晦日出家今日進辭狀同年閏二月十一日薨五十八歳系圖二

三事ハ書の大禹護子出詩の小雅也二外左少辨

藤原經房といひ人絶く所見なく一繼これありとも當時同姓同名也共二

大少の辨たりといひ誰信ん且その薨卒の年前後ありといひ共五十八歳

終り亦怪む人の名なり安徳天皇西海没玉ひ段と參考東鑑卷四元曆元年二月廿四日條下云於長門國赤間関檀浦海上源

平相逢云云及午尅平氏終敗傾二品禪尼持寶劔按察局

奉先帝八歳共以没海底建禮門院藤原入水御之處渡

邊黨源五馬允以熊手奉取之按察局同存命但先帝終不

令淳御若宮兄上者御存命云云同年四月十一日義經朝

臣注進條下云一生虜人々云云女房帥典侍先帝御大納

言典侍重衡帥局二品按察局奉抱先帝雖源平盛衰記卷四

二位禪尼入海段云二位殿今ハ限リト見ハテ給ニケレバ云云寶劔ヲ

腰ニサシ神璽ヲ脇ニ挾テ船臨給フ先帝ハ云云云ト宣ヒモハテズ海ニ

入リ給ヒケル女院ハ後レ奉ラジト御焼石ト御硯ノ箱トヲ左ノ御袂二

入レ御身ヲ重クシテツゞキテ海ニ入セ給ケル渡邊源次兵衛番ガ子ニ源五

馬允肥ト云者急飛入テ奉潛上ケルヲ肥ガ郎等熊手ヲ下テ御髮ヲ

カラ卷テ御舟ヘ引奉ル提又云神璽ハ海上ニ浮給ヒケルヲ片岡太郎經春

取上奉ル愚管鈔卷五ハ云云平氏ハ云云西國二長門の門司の

関檀の浦といふ所二松二主上をばるの二位宗盛ハ二死ありせ

神璽寶劔二具二海二入二神皇正統紀卷五安徳天皇紀云清盛ガ

女同放言卷三中 ○經房 仙鶴堂梓

女同放言卷三中

○經房

仙鶴堂梓



還幸の議及び彼とも先帝ハ上皇後白河のめん為中もかん孫ありて後位ハかかせ  
 玉いともいひて強顔ありて玉いなき又鎌倉幕府頼朝もあがり平家ハ朝敵  
 且父の讐われが討滅しもあれし自家を営むの奸ありとも後世明の  
 燕王名棟太祖第四子靖難を倡て都城を陥れ建文帝名允炆太祖孫  
 是為成祖文皇帝是為成祖文皇帝なりと謀り類ありて亦先帝恙なくせしむる必との御座を儲て  
 迎へるべきは彼三臣ハ次の年北夏までも竟は還幸の議かゝるはつらや其の  
 平維章が二位尼を論ひて天下の共主とありて忘れるあわしむ又  
 その志操上皇へは移りてあひまうて會替の恥を雪りあめせんるやうく燈  
 臺ハ密に平家の残黨を招れ集んとし相謀りてあめせんるやうく燈  
 朝敵る平家の落人等々露命を繋ぎまごのこの身は務ませしむるや  
 この後生机上の論よと當時の勢ひは還幸をあらうと助いともさか  
 智勇の足らざるのれりて忠義をたかたは似たりかれ彼経房の遺書をとりて

明の史彬が致身録を擬はるともその趣ハ似るとの事ハ非あり致身録を彼も信  
 のあり偽りあり傳寫の異聞故より定説ありむか孟氏ハ萬章を答ふこと  
 再三好事者爲之也萬章篇上といひて好事のありて人其の實なるの  
 ありべきも顧わ経房の書ハ一卷の小説なりと實録と異なり好事のよきれば

第三五人事

小松内大臣

平重衡並北條時頼 微行餘論 附出

平家物語小松大臣熊野詣の段 小松内大臣 重盛 父入道相國 淨海の不臣悪行を諫る

治承三年の夏の比盛衰記ハ五月とあり 公達引具て熊野に参詣し父の悪心止とれあり  
 重盛が運命をつらく来世の苦難をなげ玉へと祈玉云云の條下云两个の  
 求願をへし冥助をあげるとめんをうけし祈念せしむるやうに  
 火のやうありて大臣の肉身もあがりてあめせんるやうに人あめせん  
 なるもあがりて大臣下向の時若田川をさるるも嫡子権をけし得  
 惟盛以下公達淨衣の下より色なきも夏のうなまは何なるか

五の程よき... 貞能... 何れんかの津衣の世より... 大臣叔ハ我所願... 熊野詣の段ハ源平盛衰記異同あり... 記云。若田川ニ著給テ夏ノ事也ケバ河ノ端ニ涼ニ給テ權亮少將己下... 公達ニ三人河ノ水ニ浴戲レテ上リ給ヘリ薄アヲノ帷ヲ下ニ著給ヘルカ

浄衣ニ透通テ諒闇ノ色ノ如ク見エケレバ貞能是ヲ見答テ公達ノ召タル御帷... 浄衣ニ移リテナドヤ急數覺候可被召替下申ケル次ヲ以證誠殿ノ御前ニテ... 御念珠ノ時御後ニ照光リシ事有リ終ニ申ケレバ大臣打汰ク之給テ重盛... 權現ニ申入ル肯有キ御納受アルニコソ其浄衣不可脱改トテ是ヨリ又悦ビ... 奉幣アリ人々奇トハ思ヒケレドモ其御心ヲバ不知下向ノ後幾程ナクテ後ニ... 惡キ瘡ノ出給タレドモツヤク療治モ祈誓モナカリケリ... 色とりり諒闇の色ハ喪服の色なれば前よりとあつと注するは足ぬべし抑... 重盛大臣のせめて死を祈りハ厩戸豊聰耳皇子命の蘇我蝦夷が驕慢... 不臣を制しハ斑鳩宮の寢殿ゆく妃とも氣を塞ぐ遷化をまひりと... 意あてし厩戸皇子の薨せりハ推古紀二十九年春二月及平氏が聖德太子との多唐山... 傳曆下編廿五丁より下に見えり... 中も相似るあり晋の大夫范文子... 接切正字通變音肩... 范文子反自鄢陵使其祝宗祈曰君驕侈而克敵是天益其

玄同放言卷三中

〇重盛聖德太子范文子

仙鶴堂梓



疾也。難將作矣。愛我者唯祝我。使我速無及於難。范氏之福也。六月戊辰。士燮卒。文子也。杜注云。傳言厲公無道。故賢臣憂懼。因禱自裁。又このもの國語。晉語。よんをうり。文大同小異の。柳宗元。非國。曰。死之長短。而在宗。祝則誰不擇。良宗祝而乞壽焉。文子乞死而得。亦妾之大者。見唐柳東集。この言猥雜。よ過れども。亦確論とのべ。かれがどの祈死の。和漢より小説ある。或これと云く。余を詰て云。周公且ハ聖人。ある。金縢書の。成王の死。代々と禱。これ亦周公。その死を乞。よあ。余これ答て云。周書の金縢。よ由。成王の病。よわ。周公の禱。よその死。代々と乞。ハ武王の。後。よその匱。を披。その冊。よを感。て周公を返。成王あり。史記。魯。世。ハ。西説。を奉。初。ハ。武王の病。よ死。周公ト。て言を得。より。その策。を金縢の匱。よ藏。れ。と。後。又云。初。成王少時病。周公乃自揃其鬘。沈之河。以祝於神。曰云云。成王

病有瘳。及成王用事。人或譖周公。周公奔楚。成王發府見周公。禱書乃泣返。周公索隱曰。經典無文。其事或別有所出。而難周云。秦既燔書。時人欲言金縢之事。失其本末。乃云。成王少時病。周公禱河。欲代王死。藏祝策于府。成王用事。人讒周公。周公奔楚。成王發府見策。乃迎周公。又與蒙恬傳同事。或然也。かれが史記ハ證。よ。書の金縢。ハ昔儒の傳。よ。由。よ。死生ハ禱。て得。な。わ。成。れ。も。周公代。ん。と。乞。く。不死。武王の病。瘳。る。ハ。是。その至誠の應驗。よ。平大臣。范文子。ホ。グ。と。執。れ。ど。赤。采。右。衛。門。が。住。吉。の。神。ハ。禱。く。か。ん。と。い。の。命。ハ。ど。の。心。も。別。ん。と。の。わ。れ。れ。と。も。て。禱。れ。ば。その。子。大。江。舉。周。の。病。瘳。る。と。い。も。同。一。理。と。の。清。輔。袋。草。子。及。古。今。著。聞。集。卷。十。訓。鈔。第。十。訓。ハ。い。ん。を。う。り。至。誠。の。感。應。よ。り。病。の。瘳。る。ハ。わ。ん。死。生。ハ。禱。と。も。得。く。と。い。へ。或。又。云。壽。の。禱。く。得。く。ハ。翁。の。言。の。如。く。あ。べ。し。死。と。禱。る。の。ハ。得。る。や。わ。ん。譬。ハ。醫。師。の。匙。を。と。人。の。

玄同放言卷三中 ○重盛范文子周公且赤采右衛門 仙鶴堂梓

年を延ぶとハハク、その死を速くするもの多うが如し、神佛の應驗も易にわらふ事あり、  
 利口せしむるを、俗に小松の大臣と、菅公、北條泰時と並稱して、天朝の三賢と  
 比せり、あれども前輩或は其の不学を譏り、其の瑕疵を以て、毎夜、影の燈籠を  
 照らし、又宋の育王山へ黄金を寄布せしものなり、讀史餘論、駁臺、唐山へ黄金を渡せり、  
 雜話、小考、唐山へ黄金を渡せり、唐山へ黄金を渡せり、  
 其の一定違ふ事、宋史、列傳、日本傳、乾道九年、孝宗、年號、天朝、高倉院、承安三年、始附、  
 明州、綱首、以、方物、入、貢、あれ、これを盛衰記に合考し、育王山へ送金事、  
 段云、大臣ハ、我朝ノ三寶ニ財寶ヲ抛テ給フノニ非ズ、異國、佛、陀ニモ、志ヲ運給ケル、  
 奥州知行ノ時、氣仙郡ヨリ、金千三百兩ヲ進タリケルヲ、并ラセ、妙典ト云、唐人ハ、筑紫ニ在ケルヲ  
 召テ、百兩ノ金ヲ賜テ、仰ケルハ、千二百兩ノ金ヲ大唐へ渡スベシ、其内二百兩ハ、育王山ノ  
 衆徒ニ與ヘ、千兩ハ、帝ニ獻テ、當山ニ小堂ヲ建立シテ、供米所ヲ寄進セラレ、重盛ガ  
 菩提ヲ吊テ給ルベシト可申ト云云、この段、平家物語ハ、安元ノ春ノ比云云、  
 いま、山、佛、照、禪、師、ハ、附、与、ま、と、り、宋史ハ、  
 由、承安三年の事、又燈籠、大臣、事、段ニ、大臣ノ常ニ住、給ケル所ヲハ、

東へ十二間、南へ十二間、西へ十二間、北へ十二間ノ屋ヲ立テ、四方ニ、四十八ノ間ヲ點シ、  
 一方ノ十二間ニ、十二光佛ヲ一體ツ、奉立タリケレバ、四方ニ、四十八體ノ十二光佛  
 御座ケリ、其御前コトニ、常燈ヲ燃サレケレバ、四十八ノ燈籠アリ、ア、ニ、ヤ、暗夜ノ星、チ、ク、  
 澤邊ノ螢ニ似タリケリ、上ハ二十歳、下ハ十六歳、色深ク、身盛ニ、姿人ニ勝、ス、ク、カ、ニ、タ、シ、形類  
 ナキ、美女ヲ、四十八人、擇テ、常燈ニ人ツ、付ケ給テ、油ヲ添燈ヲ挑テ、ツ、エ、ト、モ、ヒ、カ、ダ、置レケル、ヨ、ハ、ヒ、  
 二十ニモ餘ケレバ、取替、取替居ラレケリ、日没ノ時ニ成ケレバ、四十八人ノ女房、ハ、タ、チ、連、衣、裝  
 花ヲ折、リ、ラ、シ、蘭、麝ノ芳ヲ新ニシテ、云云、又彼四十八間ヲ廻リケル、心ノ闇ノ深ク、ヤ、ミ、バ、燈  
 籠ノ火コソ照スナレ、チ、カ、ヒ、彌陀ノ誓ヲ憑身ハ照サヌ所ナカリケリト、チ、ヤ、ソ、モ、ル、別ノ詞ヲ交ヘズ、並、出、卷、是  
 ハカリヲ折返シ、ウ、タ、誦ハセテ、我身ハ中臺ニ座シ給ヒ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、是ヲ聽聞セラレケル、並、出、卷、  
 其佛子、チ、ヤ、ソ、モ、ル、供養、チ、ヤ、ソ、モ、ル、燈籠、チ、ヤ、ソ、モ、ル、法師、チ、ヤ、ソ、モ、ル、子、チ、ヤ、ソ、モ、ル、を、チ、ヤ、ソ、モ、ル、堂、チ、ヤ、ソ、モ、ル、に、チ、ヤ、ソ、モ、ル、坐、チ、ヤ、ソ、モ、ル、す、チ、ヤ、ソ、モ、ル、べき、チ、ヤ、ソ、モ、ル、斯、チ、ヤ、ソ、モ、ル、影、チ、ヤ、ソ、モ、ル、の、チ、ヤ、ソ、モ、ル、美女、チ、ヤ、ソ、モ、ル、と、チ、ヤ、ソ、モ、ル、と、チ、ヤ、ソ、モ、ル、く  
 せ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、れ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、ハ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、抑、チ、ヤ、ソ、モ、ル、何、チ、ヤ、ソ、モ、ル、の、チ、ヤ、ソ、モ、ル、を、チ、ヤ、ソ、モ、ル、也、チ、ヤ、ソ、モ、ル、これ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、も、チ、ヤ、ソ、モ、ル、亦、チ、ヤ、ソ、モ、ル、の、チ、ヤ、ソ、モ、ル、死、チ、ヤ、ソ、モ、ル、を、チ、ヤ、ソ、モ、ル、速、チ、ヤ、ソ、モ、ル、く、チ、ヤ、ソ、モ、ル、せん、チ、ヤ、ソ、モ、ル、る、チ、ヤ、ソ、モ、ル、よ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、一、チ、ヤ、ソ、モ、ル、ハ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、佛、チ、ヤ、ソ、モ、ル、子、チ、ヤ、ソ、モ、ル、伎、チ、ヤ、ソ、モ、ル、媚、チ、ヤ、ソ、モ、ル、と、チ、ヤ、ソ、モ、ル、身、チ、ヤ、ソ、モ、ル、後、チ、ヤ、ソ、モ、ル、を  
 憑、チ、ヤ、ソ、モ、ル、こ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、ハ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、女、チ、ヤ、ソ、モ、ル、色、チ、ヤ、ソ、モ、ル、の、チ、ヤ、ソ、モ、ル、刃、チ、ヤ、ソ、モ、ル、を、チ、ヤ、ソ、モ、ル、借、チ、ヤ、ソ、モ、ル、く、チ、ヤ、ソ、モ、ル、と、チ、ヤ、ソ、モ、ル、の、チ、ヤ、ソ、モ、ル、命、チ、ヤ、ソ、モ、ル、根、チ、ヤ、ソ、モ、ル、を、チ、ヤ、ソ、モ、ル、断、チ、ヤ、ソ、モ、ル、ん、チ、ヤ、ソ、モ、ル、と、チ、ヤ、ソ、モ、ル、め、チ、ヤ、ソ、モ、ル、べ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、ト、チ、ヤ、ソ、モ、ル、あ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、ら、チ、ヤ、ソ、モ、ル、バ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、此、チ、ヤ、ソ、モ、ル、ハ、チ、ヤ、ソ、モ、ル、大、チ、ヤ、ソ、モ、ル、臣、チ、ヤ、ソ、モ、ル、の、チ、ヤ、ソ、モ、ル、親、チ、ヤ、ソ、モ、ル、子、チ、ヤ、ソ、モ、ル、先



村翁むらおんだも笑わらふ恥はづれあらず。関羽かんうの好このむ。春秋左傳しゅうしゅうさくわんを讀よむ。將帥しやうすいの用心うしんを知らず。只是ただのそれだ。先都せんは牽ひれ死し。土肥とへ二郎にらうは請こむ。木工馬むせ允いん友時ゆうじを使つかひ。年来相狎ねんらいしやうけんる内裏うちらの女房にようぼう。櫻町中納言おうまちゅうなごんごんご成なり。書かきと與歌よを抄あり。盛衰記せいさいき又南都あんなつへ送おく遣やらる。死し醒醐せいごの邊へゆく。源藏人げんざうじん賴兼らいけんの後者ごしやうホは請こむ。日野ひの大夫だうふ三位さんいの宿所しゆくじよは立たり。その内室うちむろは對面たいめんして。別離べつりの哀傷あいしやう外聞がいもんを憚おそらる。盛衰記せいさいきの痴情ちじやうを女子こしよ小人の態たいめく。將相しやうしやうのへはあそくもわらば。既すでに南都あんなつゆく斬きるる。死しを讀よむ。經きやうを托たくく時ときを移うつす。實平じつへい土肥とへ二郎にらうをえりて敵たかを敵たかに渡わたはす。昔むかしより未聞みかん。賴朝らいぢやうも彌勒みらくの世よをばよも持もつ。ト云いふ段たんは實平じつへい答こたへ。二位家にらいけの計けいひをうも。忠ちゆうハハハ。法皇ほふわうの御計ごけいよても候まをり。就す其鎌倉かまくらゆく善便ぜんべん宜いの候まをり。御自害ごじがいハ候まをり。身みあり血ちをあへん。佛ぶつと害がいする。似にたり。それハ自害じがいハせ。死し。只今ただいまハ首くびを刎きれ。石いし妄念まうげんも起おこりぬ。何なにと死し振ふるり。吾われハ知し

甚おと頸くびを打うつ。盛衰記せいさいき四十五しよじゆうごの說せつと利りコセ。その法ほふその愚ぐに甚おく。又また多く得える。かゞ。人のあはれ。平家へいけの三不肖さんふせうハ池大納言いけだいなごんご。賴盛らいせい内大臣ないだいじん。宗盛そうせい三位さんい中將ちゆうしやう重衡じゆうかうなり。怒いかり。父兄ふけいの威德ゐとくより。槐門かゐもん清花せいかうの上うへより。その半生はんせいたも保たもへ。猶幸なほさいちやうと。孟氏もうし誦じゆ孔子こうし之言のげん曰いは。志士しし不ふ忘わう。溝壑こうこく勇士ゆうし不ふ忘わう。喪さう其その元もと。滕てん文ぶん公こう。僕夫ぼくふより。常じやうより。この語ことばを記誦きじゆし。く。その志こころを行なす。難がたし。臨のぞみ。苟なほも脱だつる。又また唯ただ恥辱ちじよくは速すみく。あん故ゆゑ。○ゆび。上集じやうしゆあり。北條きたう時賴ときらい入道にようだう。道崇みちたかが國中くにちゆうを微行びかうく。守護地頭しゆごぢちゆうの邪正じやせいを察さつ死しといふ小説せうせつハ彼入道かになようだうの執權しやくけん。その政せいよろ。嚴密げんみつなり。時俗ときじやく竊ひそか。畏おそり。云いふ。云いふ。時賴ときらいハ刻薄こくはくなり。讀史餘論よみしよる論。卷まき之の下した。云いふ。時賴ときらいその兄あに。經時きやうじよ。つ。權けんを掌つかへ。始はじめは。その主しゆ賴經らいきやうを逐おひ。その後そののち三浦みうら泰村たいむら一族いちよくを。終つひに滅めつす。又またその主しゆ賴嗣らいしゆを逐おひ。峯殿みねのどの道家だうがの薨しゆうせ。世よの人ひとハ。関東くわんとの籌策ちゆうさくを疑うたがひ。程ほどは。なく。舊主きゆうしゆ兩人にりん。賴經らいきやう。賴嗣らいしゆ。共ともに薨しゆうせ。疑うたがひ。故ゆゑ。あ。わ。か。く。

玄同放言卷三ノ中

○時賴微行餘論

仙鶴堂梓





違ふ時俗の理義も暗き。時頼を賢明とせんとく。却てこれを愚将とせんとく。傳く以口實と云。嗚呼嘆ばべきや。

第三十六事

狄青錢ト

小説載捕挾間之役信長夜謁熱田神祠禱之曰。駿兵百萬既陷數城勢吞中國士卒戰栗不知謀所出。自非假神威以逆擊之。豈可得克大敵乎哉。因顧軍士曰。孤欲以錢卜試雌雄焉。今所投數錢皆形面為錢。孤必大捷。若無錢。則議和焉耳。此明神之心也。祝了。手自擲數錢於幣壇。使左右抗火視之。乃其錢皆面時神宮中。忽聞鳴鑼。士卒感激勇氣百倍。信長亦大喜。明日進兵大戰于捕挾間。一舉獲敵將義元首級。蓋信長好詭計。竊用兩面錢。獎士卒。又以鳴鑼誘衆心而已。是謂兩面錢ト云。蓋將軍出無錢ト云。此小説宋の仁宗此時の事也。

名将狄青が事と相類せり。馮氏知囊全集卷十五。智術部。曰。南俗尚鬼。狄武讓征儂智高時。大兵出桂林之南。因祝曰。勝負無以爲據。乃百錢自持之。與神約。果大捷。則投此錢。盡面左右。諫止。倘不如意。恐阻師。武襄不聽。萬衆聳視。已而揮手。俛一擲百錢。皆面。於是舉兵。歡呼聲震林野。武襄亦大喜。顧左右取百錢。即隨錢。疎密布地。而帖釘之。加以青紗籠手。自封焉。曰。俟凱旋。當謝神。取錢。其後平邕州。還師。如言。取錢。幕府士大夫共視。乃兩面錢也。馮氏自注云。桂林路險。士心惶惑。故假神道。以堅之。と云。本邦の野史竊これと攬。總見院右府の軍略。せしめん。智囊全集の儂智高ハ。廣源諸蠻の首領なり。儂氏ハ。唐初より即雄。黃氏周氏と州は。據るもの十有八なり。儂氏尤強かり。と云。唐末に交趾強盛あり。れば。廣源これ服屬せり。儂全福が友人を殺さる。よ及。この妻

改<sup>メ</sup>商人<sup>ノ</sup>適<sup>ク</sup>智高<sup>ヲ</sup>を生<sup>ミ</sup>智高<sup>ハ</sup>姓<sup>ヲ</sup>冒<sup>シ</sup>て儂氏<sup>ト</sup>なる<sup>ノ</sup>壯年<sup>ノ</sup>及<sup>テ</sup>其母<sup>ト</sup>共<sup>ニ</sup>猶州<sup>ノ</sup>黨<sup>ヲ</sup>據<sup>リ</sup>國<sup>ノ</sup>號<sup>ヲ</sup>を建<sup>テ</sup>大曆<sup>ト</sup>を以<sup>テ</sup>仁宗<sup>ノ</sup>の皇祐元年九月。儂智高<sup>ハ</sup>叛<sup>ク</sup>邕州<sup>ヲ</sup>を寇<sup>シ</sup>四年<sup>ノ</sup>及<sup>テ</sup>邕横貴藤梧康端龔得<sup>等</sup>の州<sup>ヲ</sup>を陷<sup>ク</sup>遂<sup>ニ</sup>廣州<sup>ヲ</sup>を圍<sup>ミ</sup>尹洙<sup>ガ</sup>薦<sup>ム</sup>を以<sup>テ</sup>宋<sup>ノ</sup>朝<sup>ニ</sup>狄青<sup>ヲ</sup>を荆湖宣撫使<sup>ト</sup>提舉<sup>シ</sup>經制盜賊事<sup>ト</sup>孫沔<sup>余靖</sup>と與<sup>ニ</sup>儂智高<sup>ヲ</sup>を征<sup>セ</sup>し十二月<sup>ニ</sup>陳曙<sup>師</sup>を帥<sup>テ</sup>儂智高<sup>ヲ</sup>を討<sup>ク</sup>金城驛<sup>ニ</sup>敗績<sup>ス</sup>狄青<sup>遂</sup>に曙<sup>ヲ</sup>を執<sup>ル</sup>と斬<sup>ル</sup>孫沔<sup>余靖</sup>等<sup>相</sup>顧<sup>ク</sup>愕然<sup>ト</sup>諸將<sup>股</sup>栗<sup>シ</sup>敢<sup>テ</sup>仰視<sup>ス</sup>の<sup>所</sup>五年<sup>ノ</sup>春<sup>ニ</sup>狄青<sup>大</sup>儂智高<sup>ヲ</sup>を邕州<sup>ヨ</sup>ウチ敗<sup>ス</sup>追奔<sup>五十</sup>里<sup>斬</sup>首<sup>萬</sup>計<sup>アリ</sup>智高<sup>ガ</sup>く<sup>ク</sup>夜遁<sup>ス</sup>大理<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>遂<sup>ニ</sup>明<sup>ノ</sup>城<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>賊<sup>ノ</sup>屍<sup>ヲ</sup>を檢<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>金龍<sup>ノ</sup>衣<sup>ヲ</sup>を衣<sup>フ</sup>る<sup>ノ</sup>あり衆<sup>謂</sup>智高<sup>既</sup>に死<sup>セ</sup>り<sup>ト</sup>上<sup>聞</sup>あ<sup>ズ</sup>と<sup>青</sup>云<sup>フ</sup>安<sup>ト</sup>の<sup>詐</sup>を<sup>わ</sup>ら<sup>ズ</sup>と<sup>知</sup>ん<sup>ヤ</sup>寧<sup>智</sup>高<sup>ヲ</sup>を失<sup>フ</sup>とも<sup>敢</sup>朝廷<sup>ヲ</sup>を誣<sup>ル</sup>功<sup>ヲ</sup>を貪<sup>ル</sup>ト<sup>とい</sup>く<sup>後</sup>夏<sup>五月</sup>高<sup>若</sup>訥<sup>罷</sup>る<sup>狄</sup>青<sup>ヲ</sup>を<sup>以</sup>て<sup>樞</sup>密<sup>使</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>正</sup>史<sup>ニ</sup>

載<sup>ル</sup>所<sup>ノ</sup>の<sup>藥</sup>略<sup>ノ</sup>但<sup>シ</sup>の<sup>兩</sup>面<sup>錢</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>士</sup>卒<sup>ヲ</sup>を<sup>獎</sup>せ<sup>し</sup>とい<sup>ハ</sup>小説<sup>アリ</sup>本<sup>傳</sup>曰<sup>ク</sup>狄青<sup>罷</sup>會<sup>京</sup>師<sup>大</sup>水<sup>嘉</sup>祐<sup>元</sup>年<sup>避</sup>于<sup>相</sup>國<sup>寺</sup>行<sup>止</sup>殿<sup>上</sup>人<sup>情</sup>頗<sup>疑</sup>知<sup>制</sup>誥<sup>劉</sup>敞<sup>出</sup>知<sup>揚</sup>州<sup>陛</sup>辭<sup>言</sup>曰<sup>陛</sup>下<sup>幸</sup>愛<sup>青</sup>不<sup>如</sup>出<sup>之</sup>以<sup>全</sup>其<sup>終</sup>帝<sup>然</sup>之<sup>乃</sup>以<sup>使</sup>相<sup>判</sup>陳<sup>州</sup>青<sup>爲</sup>人<sup>慎</sup>密<sup>寡</sup>言<sup>其</sup>計<sup>事</sup>必<sup>審</sup>中<sup>機</sup>會<sup>而</sup>後<sup>發</sup>行<sup>師</sup>先<sup>正</sup>部<sup>伍</sup>明<sup>賞</sup>罰<sup>與</sup>士<sup>卒</sup>同<sup>饑</sup>寒<sup>勞</sup>苦<sup>雖</sup>敵<sup>猝</sup>犯<sup>之</sup>無<sup>一</sup>士<sup>敢</sup>後<sup>先</sup>者<sup>故</sup>數<sup>有</sup>功<sup>未</sup>嘗<sup>專</sup>賞<sup>蔽</sup>下<sup>故</sup>人<sup>皆</sup>樂<sup>爲</sup>之<sup>死</sup>青<sup>在</sup>樞<sup>府</sup>日<sup>有</sup>狄<sup>梁</sup>公<sup>之</sup>後<sup>儂</sup>仁<sup>武</sup>后<sup>時</sup>持<sup>梁</sup>公<sup>畫</sup>像<sup>及</sup>告<sup>身</sup>十<sup>餘</sup>通<sup>獻</sup>諸<sup>青</sup>以<sup>爲</sup>青<sup>之</sup>遠<sup>祖</sup>青<sup>謝</sup>之<sup>曰</sup>一<sup>時</sup>遭<sup>際</sup>安<sup>敢</sup>自<sup>附</sup>梁<sup>公</sup>厚<sup>贈</sup>其<sup>人</sup>而<sup>遣</sup>之<sup>踰</sup>年<sup>卒</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>智</sup>高<sup>ハ</sup>漢<sup>ノ</sup>衛<sup>青</sup>が<sup>人</sup>と<sup>似</sup>り<sup>景</sup>慕<sup>セ</sup>り<sup>狄</sup>亦<sup>青</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>其</sup>名<sup>と</sup>せ<sup>し</sup>の<sup>材</sup>伯<sup>仲</sup>と<sup>の</sup>功<sup>も</sup>相<sup>似</sup>たり<sup>無</sup>益<sup>ノ</sup>の<sup>辯</sup>を<sup>れ</sup>ど<sup>も</sup>狄<sup>青</sup>が<sup>本</sup>傳<sup>を</sup>考<sup>へ</sup>事<sup>ノ</sup>を<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>ほ<sup>く</sup>た<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>又</sup>按<sup>ず</sup>る<sup>ニ</sup>錢<sup>を</sup>







